静岡発 こう読む

チャットGPTと戯れる

▶▶▶加藤 裕治

ここ数カ月で急に話題となったチャットGPTだが、それを使ったとおぼしき学生コメントなども現れてきた。ネットには、チャットGPTで生成された文章を判定する方法も出回っているが、その方法の確からしさが不明だ。なかなか悩ましい。

ところでチャットGPTとは何か。当のチャットGPTに聞いてみた。「OpenAIによって開発された大規模な自然言語処理モデルです。ChatGPTは、自然な対話や質問応答を行うために設計されており、人間のような応答を生成することができます」。この後も長い答えがつづく。チャットなので、わからない用語や不明な点をさらに尋ねると丁寧に答えてくれる。解説記事よりわかりやすい部分もあった。日本語も違和感がない。ただし質問内容やニュアンスの違いで、回答も異なる場合がある。

一方で、静岡文化芸術大学の場所を尋ねると、「富士山の麓にあります」との答え。本当ですか、と入力すると「大変申し訳ありませんでした。袋井市ですね」。間違っていませんか、と尋ねると「浜松市天竜区ですね」。ずいぶん近づいた。私が中区だと思うのですが、と正解を入力すると、「おっしゃる通りでございます。浜松市中区でした」との回答。だが最後に中区は間違いでした、とあえて入力すると、「混乱していました。浜松市天竜区ですね」。私の質問に忖度(そんたく)したような回答になってしまった。

現在チャットGPTのような生成AIに関して、さまざまな議論が現れ、危うさも指摘される一方で、実用への動きも加速している。私は仕組みを完全には理解していないので、利用者としての感想だが、生成された内容の妥当性や真偽の精度を高めようとするほど、利用者の判断・吟味が必須であることは間違いない。

とはいえ、使ってみると次々と会話が進み面白い。相棒という表現がぴったりだ。だが現時点では、もっともらしく答えるが、信用ならない相棒でもある。今後の生成AIの発展は未知数で、信頼が深まるのか、別れが訪れるのか、まだわからない。

（静岡文化芸術大教授）

2023年5月21日
中日新聞（朝刊）p.5